

第30号の刊行にあたって

手 嶋 將 博

文教大学教育学部教授（同教育研究所所長）

Introduction

TESHIMA MASAHIRO

(Director-General, Institute of Educational Research, Bunkyo University)

Covid-19いわゆる新型コロナウイルスは、自らも変異を繰り返しながら、世界の様々な価値観やありようを変容させ続けており、早くも2年が経とうとしている。このような閉塞感あふれる状況の中、途切れることなく本紀要を発行し続けられていること、執筆いただきました皆さまには心より感謝申し上げたい。

紀要第30号では、依頼論文2篇、研究論文4篇、実践研究1篇、実践報告1篇、計8篇の研究成果を掲載している。

今年度の共通テーマは「『持続可能な開発目標（SDGs）』の視点をふまえた教育実践」に設定した。2020年度から実施されている学習指導要領では、2020-2030年におけるESDの国際的な実施枠組みである「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて（ESD for 2030）」を意識した「持続可能な社会の担い手」の育成に向けた教育課程の明確化が掲げられ、前文や総則には「持続可能な社会の創り手の育成」という表現が明記されている。こうした動きを受け、小学校の家庭科、道徳科、中学校の社会科や理科、技術・家庭科などにも「持続可能」という言葉が使われるなど、「持続可能な開発目標（SDGs）」に関する学習内容が盛り込まれ、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善や、教科等横断的な視点でカリキュラム・マネジメントに努めることが求められている。

そこで、今号の特集では、「持続可能な社会の創り手」としての資質能力の涵養を目指す、「『持続可能な開発目標（SDGs）』の視点をふまえた教育実践」に関する論考として、「ESD用地域副読本を活用した教師教育実践」、「『Society5.0 for SDGs』を題材とした探究的な学習の課題に関する一考察—『数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシー）』における実践を想定して—」の、異なる視点からの論文2本を掲載した。

また、自由研究として、「法の時間のなかでゆがむ『子ども』—学テ裁判が形成した時間的地平—」「理想の教師像と英語教師になる動機づけの関係—動機づけ自己システムを応用して—」「音楽づくりの教育的可能性と社会への広がり—エージェンシーの発揮と連鎖—」「少年院における教科指導の役割」（以上、研究論文）、「DX時代における持続可能な海外教育研修を目指して—ニューヨーク国連研修オンライン実践と参加学生

の動向分析－」（実践研究）、「日本とインドネシアの若者による国際協働プログラム実践報告－小学校での国際理解教育実践をリモートでサポート－」（実践報告）を収録しており、さまざまな立場・視点から多角的かつ実証的な考察が繰り広げられている。

本紀要が、研究・教育いずれにかかわる皆様にとっても、新たな視点と示唆を得るための一助となれば、幸甚の極みである。